

## 食品ロスからつながる世界の社会課題

### －実践による意識と行動の変容－

#### Global Social Issues Connected by Food Loss:

#### Transformation of consciousness and behavior through practice

倉田 薫子

KURATA Kaoruko

横浜国立大学教育学部・総合学術高等研究院

〔要約〕生物多様性国家戦略 2023-2030 では、基本戦略の 1 つに「一人ひとりの行動変容」が掲げられ、行動目標に「食品ロスの半減」が示されている。これまで必ずしも生物多様性との関係性が意識されてこなかった消費・廃棄、資源循環に関わる分野において生物多様性との関連を意図した目標を示したことは注目すべきことである。一方で、食品ロスという問題を、消費・廃棄以外の世界の多様な社会課題と結び付けて考えることは浸透しておらず、意識や行動の変容を促すには道のりが遠い。そこで、食品ロスと社会課題、特に生物多様性とのつながりを可視化するワークショップを行い、その結果現れた意識の変容について検証した。本実践を通して、多くの学生は身近な問題が世界の問題とつながっているという気付きを得、問題のつながりを意識していこうという意欲を持ったものの、行動変容へは至らず、自らが ESD プログラムを構成する意欲を持つ学生も少なかった。身近な社会課題について掘り下げて考えるワークショップは、社会課題の本質的な理解に対して有効であるといえる。一方で、行動変容にまでは至らなかったことから、継続性のあるプログラムの開発が必要であると考えられる。

〔キーワード〕食品ロス、生物多様性、社会課題、意識の変容、行動変容

### 1. はじめに

2023 年 3 月に閣議決定された「生物多様性国家戦略 2023-2030」では、5 つの基本戦略のうちの 1 つに「生活・消費活動における生物多様性の価値の認識と行動（一人一人の行動変容）」が掲げられている（環境省、2023）。ここには、「学校等における生物多様性に関わる環境教育を推進する（行動目標 4-1）」や「自然環境を保全・再生する活動を促進する（行動目標 4-5）」といった行動目標に並んで、「食品ロスの半減及びその他の物質の廃棄を減少させることを含め、生物多様性に配慮した消費行動を促すため、生物多様性に配慮した選択肢を周知啓発するとともに、選択の機会を増加させ、インセンティブを提示する（行動目標 4-4）」ことが明記されている。行動目標 4-4 では、食品ロスの削

減をはじめとして、これまで必ずしも生物多様性との関係性が意識されてこなかった消費・廃棄、資源循環に関わる分野において、各分野の協力とそれを取り巻く消費の価値観の変革を進める（環境省、2023）ことが意図されている。

「生物多様性」という言葉の認知は、平成 21 年調査の 36.4% から、令和 4 年度調査の 72.6% と飛躍的に増加した（内閣府、2022）。しかし言葉の意味を知っていると回答したのは 3 割弱にとどまっており、依然身近な問題とは言い難い。一方で、食品ロスは日々生活する中で身近な問題であり、生物多様性国家戦略の施策の中で「食品ロスの半減」という他の目標と比べて具体的な行動目標が記述されていることは、大いに着目すべきことである。

小学校の総合的な学習の時間などにおいて、食品ロスに関する取り組みを実施する学校は多い（例えば愛知県，2019；埼玉県，2020；東京都教育委員会，2020 など）。それだけ食品ロスは子どもにとっても身近でわかりやすい社会課題ともいえる。しかし，これらの取り組みの多くは，自治体主導の出前講座（國本ら，2019）や教材配布（たとえば消費者庁，2021）などによるもので，生産・流通や消費・廃棄のような個人的解決に帰する探究に留まることが多い。その原因として，各教科の学習において食品ロスの学習につながる内容は多く扱われているものの，授業実践者である教員が食品ロスの特段に意識化しておらず（石島・松葉口，2022），生産・流通，消費・廃棄より先の世界の社会課題にまで意識が向いていないことが推測される。生物多様性国家戦略の一項目に食品ロスが挙げられている真の意味を理解し，そのつながりを教員が意識して授業を行うことで初めて，生物多様性国家戦略が謳う行動目標に近づくことができるといえよう。本研究では，食品ロスという身近な問題から，生物多様性につながる世界の社会課題を認識させるプロセスを実践し，その効果について検討する。

## 2. 研究目的および方法

本実践では，教員養成系学部の大学生を対象に「食品ロスが世界のどのような問題と関連しているのか」についてワークショップを行い，それを通して彼らの食品ロスに対する意識の変化，行動の変容について明らかにす

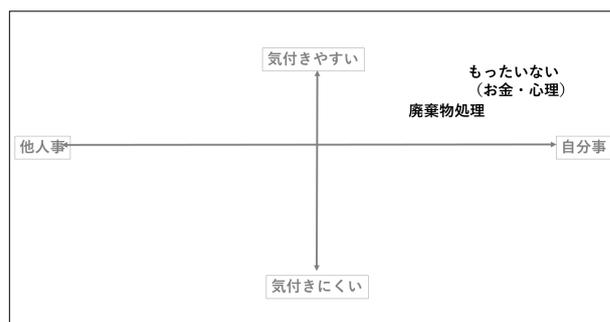


図1. 最初に提示したワークシート. ここに軸に従って付箋で貼っていく.

ることを試みた。主に理科を専攻する教育学部の大学2年生（2023年25名，2024年度23名）を対象に90分の授業を使って行った。まず，学生を4-5人のグループに分け，グループごとに「食品ロス」と聞いて思いつく問題を「自分事・他人事」軸，「気づきやすい・気づきにくい」軸の2軸に沿って，付箋に書き出して貼らせた（図1）。続いて，それらの問題が，SDGsの目標番号の何番に該当するかを検討させた。グループごとにできた図を発表し，欠けている視点について認識させたのち，授業者がまとめた図について解説した。最後に，Google Formを用いて6問からなるアンケート（表1）に記述させた。

## 3. 結果と考察

アンケートの結果，世界で起きている問題（Q1）について，86.9%が「関心がある」，「やや関心がある」と回答し，高い割合で学生たちは社会課題に対して関心を持っていることが明らかになった（表2）。

表1. アンケートの設問内容.

設問	解答型式
Q1 世界で起きている諸問題について，どの程度関心がありますか	5段階
Q2 世界で起きている諸問題について，自分自身はどのように取り組んでいますか	複数選択
Q3 食品ロスについて，今までの捉え方はどのようなものでしたか	記述
Q4 今日の活動を通して，食品ロスに対する理解は深まりましたか	5段階
Q5 今日の活動を通して，考えたことや感想を記述してください	記述
Q6 以下のうち当てはまるものすべてを回答してください（意識の変容）	複数選択

社会課題に対する自分自身の取り組み (Q2) については、複数回答の選択肢として挙げた 8 項目の平均選択数は 1.5 個で、そのうち「情報を収集する」が最も多く 37.0%、具体的な行動を伴う選択肢 (選択肢 2, 3, 4) は合わせて約 35%であった (表 3)。一方で「特に何もしていない」と回答したのは 34.8%に上り、社会問題への関心が高い一方で、情報収集すら行っていない実態が明らかになった。また「何をすればよいかわからない」も 37.0%と、情報収集と同率で最も高い値を示した。この中には、「情報収集をしたが、何をすればいいかわからない (3 件)」と「何もしていないし、何をすればいいかわからない (6 件)」の両方が含まれていた。

生物多様性に関する世論調査 (内閣府, 2022) では、環境配慮行動について「自分一人が行動しても意味がないと感じる (19.3%)」「自分には関係がないと感じる (2.3%)」「興味がない (2.6%)」など、取り組まない要因についていくつか示されている。中でも「何をしたいかわからない (50.7%)」は、本実践の中で大学生も同じように高い割合で感じていた (37.0%)。直接的な効果が目に見えにくいこと、情報過多により結果的に何をすればいいかわなくなったりすることで、自身の行動の意義づけができないことが、具体的な環境配慮行動への参加を押し下げているのかもしれない。

ワークショップで学生が作成したワークシートの一例 (図 2A)、および授業者が作成したワークシート (図 2B) を挙げる。学生が作成したものは、授業者が作成した関係する社会課題のうち、「気づきやすい」かつ「自分事」のエリアに挙げられる事項に集中していた。中には、「処理にかかるお金やエネルギー」、「ESG」などに言及したものも見られたが、ほとんどは SDGs ウェディングケーキ

モデル (Stockholm Resilience Center, 2016) に示される経済と社会資本にかかわる目標までの認識にとどまっていることが窺えた。ほとんどの班で「自分事」が少なく、SDGs との関連については目標 12「つくる責任、つかう責任」が最も関連する事項が多いこと、目標 7, 13, 14, 15 は気づきにくく他人事であることを認識していたことから、身近なことからつなげて、身近なこと以外も自分事化していくためのプロセスが重要であるといえる。

この活動を通して全ての学生が「理解が深まった」、「やや深まった」と回答した (100%, 表 4)。実際に事前・事後で自由記述させた回答 (Q3, Q5) を AI テキストマイニング (ユーザーローカル, 2025) で単語の出現頻度を解析したところ、記述された総単語数は 179 語 (事前) から 413 語 (事後) へ大幅に増加した。特に事前の記述にはほとんど記述されなかった「環境」、「生物多様性」、「SDGs」などの名詞が、事後の記述では多く見られた (表 5)。また動詞でも、「考える」、「知る」、「学ぶ」などの主体的行動に関する記述が増加した。これらの結果から、彼らの食品ロスへの意識が食品に関わることだけでなく、社会課題、特に生物多様性にまで向いたこと、主体的に取り組むために自分自身の知識を増やす必要があることに気づいたことが窺える。前述した「何をすればいいかわからない」という回答についても、自身の行動の意義づけのために「知る」、「気づく」、「考える」ことが重要であることが認識されたと考えられる。ワークショップを通してどのような意識や行動の変容が見込めるかを明らかにするため、Q6 に挙げた選択肢を複数回答で選択させたところ、平均選択数は 4.4 個となった。身近な問題が世界の問題とつながっているという気づきを得、想像することの難しさを認識して問題のつながりを今後意識していこうという意欲を持った (選

表2:「Q1:世界で起きている諸問題について、どの程度関心がありますか」への回答.

回答	回答数(人)	割合 (%)
ある	4	8.7
ややある	36	78.3
どちらでもない	5	10.9
あまりない	1	2.2
ない	0	0.0

表3:「Q2:世界で起きている諸問題について、自分自身はどのようなように取り組んでいきますか」に関する回答.

Q2 選択肢	回答数(人)	割合 (%)
1 情報を収集する	17	37.0
2 活動に参加する	2	4.3
3 募金をする	5	10.9
4 身近な取り組みをコツコツしている	9	19.6
5 特に何もしていない	16	34.8
6 何をすればいいのかわからない	17	37.0
7 関心がない	1	2.2
8 その他	0	0.0

表4:「Q4:今日の活動を通して、食品ロスに対する理解は深まりましたか」への回答.

回答	回答数(人)	割合 (%)
深まった	31	67.4
やや深まった	15	32.6
どちらでもない	0	0.0
あまり深まらなかった	0	0.0
深まらなかった	0	0.0

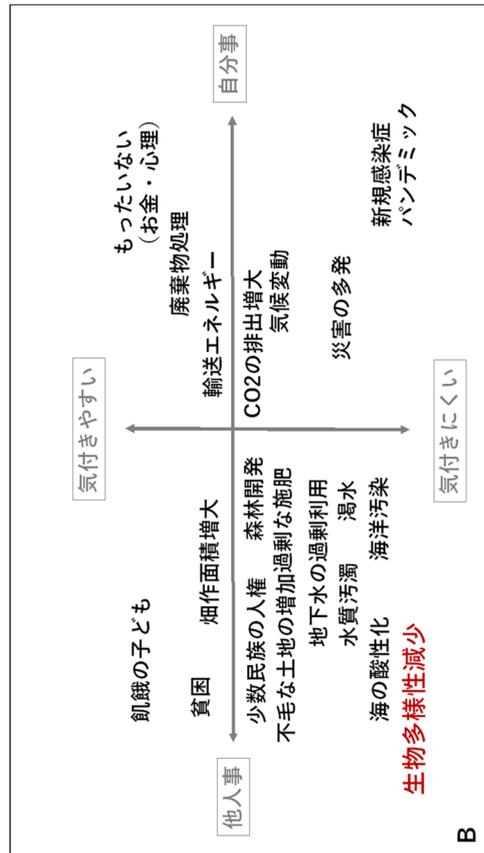
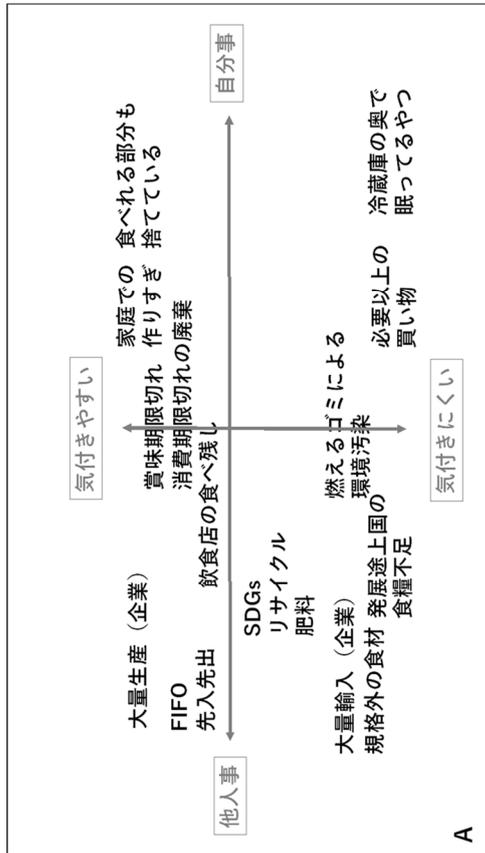


図2. ワークシートの例. A: 学生が作成したワークシートから文字を起こしたもの, B: 授業者が作成したワークシート.

択肢 1, 2, 3, 5, それぞれ 63.0~78.3%, 表 6) ものの, 世界に目を向けたり, 自分の生活を変えると, 自らの行動を変容させたりするスコアは相対的に低かった(選択肢 4, 6. 41.3~47.8%)。また教員養成系学部

であることから, 学校教育での重要性は半数程度が認識するものの(選択肢 7, 56.5%), 実際に自分が ESD プログラムを構成することへの意欲を持つ(選択肢 8) 学生は 19.6%と低かった。

表5. ワークショップ前後における用語の出現頻度の変化(一部抽出).

		事前	事後
名詞	食品ロス	11	43
	環境	1	11
	感染症	0	11
	生物多様性	0	10
	SDGs	0	9
	貧困	6	7
	身近	5	7
	飢餓	3	6
	世界	5	5
	他人事	1	4
	自分事	0	3
	災害	0	3
	動詞	考える	6
知る		2	23
思う		9	22
感じる		4	16
繋がる		3	15
関わる		2	10
気づく		0	8
捉える		2	6
学ぶ		0	6
伝える		0	5
食べる		6	1
形容詞	もったいない	10	6
	気づきにくい	0	2
	気づきやすい	0	1
	難しい	0	2

以上のことから, 本実践では 90 分の活動で, 参加者が食品ロスが世界の社会課題に広くつながっていることを認識することができ, それによる意識の変容がもたらされたと評価できる。身近な社会課題について改めて掘り下げて考えるワークショップは, 社会課題の本質的な理解と他の課題とのつながりを認識するうえで極めて有効であるといえる。

一方でいくつかの課題も明らかになった。1つ目は, 自分自身の行動変容にまでは至らなかったこと(41.3%, 表 6), 2つ目は, 自ら ESD の視点に立ったプログラムを構成していく意欲を醸成できなかったこと

(19.4%, 表 6) である。1 回限りのワークショップでは行動の変容は難しく, 継続的なワークショップなどのプログラム開発が必要であると考えられる。継続的なプログラムの場合, 食品ロスだけでなくさまざまな社会課題を横断的に結びつけることが可能であり, 持続可能な開発目標同士の相互の関連に基づいて, 社会課題を包括的に理解することができるようなプログラムが期待される。教員養成やリカレント教育などにおいて学校教育の中で実践可能なテーマを教員自身が探求していくことで, 移り変わる社会課題に対応し,

表6. 「Q6: 以下のうち当てはまるものすべてを回答してください」に関する回答.

Q6	選択肢	回答数(人)	割合 (%)
1	身近な問題が世界の問題につながっていることが意外だった	36	78.3
2	見えないところで問題同士が繋がっているのを想像するのは難しいと思った	31	67.4
3	1つの問題が複数のSDGsに関連していることがわかった	31	67.4
4	世界の問題に目を向けていこうと思った	22	47.8
5	問題のつながりを意識しようと思った	29	63.0
6	自分自身の生活を変えていこうと思った	19	41.3
7	学校教育の中で社会の問題を横断的に考えることは重要だと思った	26	56.5
8	ESDプログラムを構成することに意欲をもった	9	19.6
9	その他	0	0.0

世界的視野に立った教育の実現とそれによる社会の変容に貢献できると考えられ、そのためのプログラムの検討・開発・改善が今後の課題となる。

本研究は JSPS 科研費 23K02360 の助成を受けたものです。

### 参考文献

愛知県 (2019) 〈愛知県 食品ロス削減環境学習プログラム〉学ぼう！へらそう！「食品ロス」～大切な食べ物を、おいしく食べきるために～指導者用マニュアル. <https://kankyojoho.pref.aichi.jp/foodloss/common/images/learning-program/manual.pdf> (2025年2月8日確認)

石島恵美子・松葉口玲子 (2022) 小学校における食品ロス学習クロスカリキュラムの検討ー全教科の教科書分析を基にー. 消費者教育 42 : 1-11.

環境省 (2023) 生物多様性国家戦略 2023-2030. <https://www.env.go.jp/content/000124381.pdf> (2025年2月8日確認)

國本あゆみ・向井潤子・松井佳津子・榎尾幸子・小野和夫 (2019) 食品ロス削減の取り組みー和気町立本荘小学校における食育活動ー. 山陽論叢 25:253-262.

内閣府 (2022) 令和4年度生物多様性に関する世論調査報告書概略版. <https://survey.gov-online.go.jp/hutai/r04/r04-seibutsutayousei/gairyaku.pdf> (2025年2月8日確認)

埼玉県 (2020) 第5学年 総合的な学習の時間 学習指導案. <https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/28005/5nennseisougougyoudaminamisyau.pdf> (2025年2月8日確認)

Stockholm Resilience Center (2016) A

new way of viewing the Sustainable Development Goals and how they are all linked to food. <https://www.stockholmresilience.org/research/research-news/2016-06-14-the-sdgs-wedding-cake.html> (2025年2月8日確認)

消費者庁 (2021) 食品ロスについて知る・学ぶ. [https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer\\_policy/information/food\\_loss/education/](https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_policy/information/food_loss/education/) (2025年3月1日確認)

東京都教育委員会 (2020) 小学校総合的な学習の時間第5学年「豊かな恵みを未来につなげよう～食品ロスの問題から考える～」. [https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/documents/d/kyoiku/02\\_p52-56](https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/documents/d/kyoiku/02_p52-56). (2025年2月8日確認)

ユーザーローカル (2025) AI テキストマイニング. <https://textmining.userlocal.jp/> (2025年2月8日確認)